子どもが活きる　あたたかな学校

佐波郡玉村町立中央小学校

■主　題　自己有用感の高まりを目指した
人間関係づくり

■校　長　堀越　清次
■児童数　５６２名
■学級数　２０学級
■執筆者　教諭　筑井みつ子　　原田　知典
■住　所　〒370-1105　佐波郡玉村町福島４０１
■電　話　０２７０－６５－５６０９
■http://www.tamamura.ed.jp/chuo-e
■研究所　玉村町教育研究所

１　はじめに

本校は、平成２０～２１年度の２年間文部科学省人権教育開発事業による研究指定校として研究を行ってきた。主に、人間関係づくり、授業づくり、学習・生活習慣づくりの３つの観点から人権教育の常時指導のあり方について実践してきた。本稿ではその中でも人間関係づくりについての研究実践を紹介する。

２　研究の概要

学校は、子ども達にとってのびのびと楽しく過ごせる場でなければならない。子ども達が学校を「楽しい」「居心地がよい」と感じるためには、自分が集団の一員として必要とされていたり、互いのよさを認め合えたりすることができるような雰囲気が不可欠である。本校の児童は明るく元気であり、誰とでも親しく交わることができる反面、友達同士であっても、相手を傷付けてしまう言葉や人の間違いをからかう言葉を悪気なく使ってしまうことで、トラブルになることもある。

望ましい人間関係とは、友達の気持ちを考えた優しい言動をとることができ、互いのことを大切にし、認め合うことができるような関係である。本校ではそのために、子ども達が集団の一員として必要とされ、認められているという気持ち（自己有用感）を高めたいと考えた。本校ではその実現のため以下の３つについて研究を行ってきた。（図１）

（１）異学年交流活動の改善
（２）ＱＵを用いた児童理解と
　　学年学級経営の改善
（３）校内の環境整備

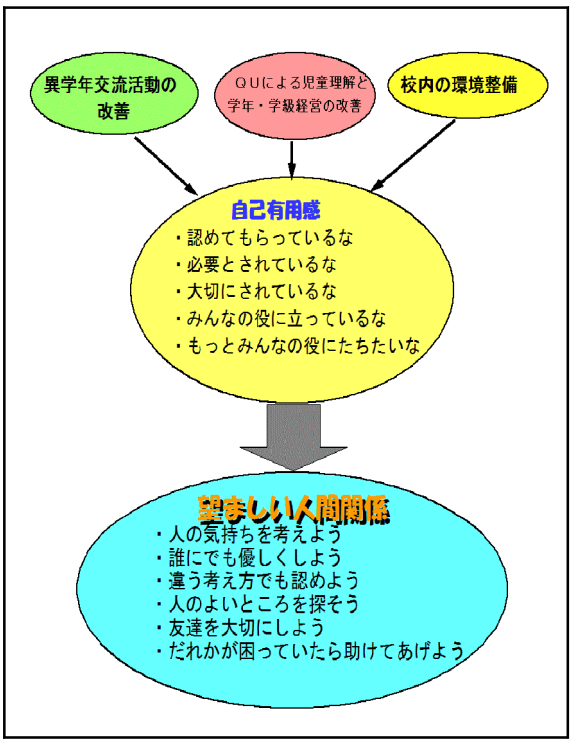


図１　研究のイメージ

３　研究の実際

（１）異学年活動の改善

本校では、伝統的に異学年での活動を行っていたが、毎回自分のグループがどこなのか分からないような所属意識の低い児童が見られた。また、「リーダーだけ頑張ればいい」いう意識の児童が多く、本来学校のリーダーであるべき高学年の児童の責任感を高められる活動になっていなかったという課題があった。これは、児童一人ひとりが異学年集団の中で認められる機会や助け合う場面が少ないからと考えた。そこでグループ編成の方法や活動の内容を見直すことで、異学年交流活動が今まで以上に児童の自己有用感を高めるような活動になるように改善を図った。

①　グループについて

ア　グループ編成

活動内容にあわせて児童が主体的に考え、グループ形態を選択できるようにした。また、６年生全員が、異学年集団に関するいずれかのリーダーとして役割を担えるようにした。

【チーム】小グループ	７～８名で構成する小規模グループ。すべての学年が入り、男女比もほぼ均等にする。全校で７２チームになる。
【班】中グループ	４つのチームが集まって構成する中規模グループ。全校で１８班になる。各班に１～２名の担当教師がつく。
【団】大グループ	６つの班が集まって構成する大規模グループ。全校で赤組団、黄組団、青組団の３団になる。

１つの団の構成は以下のようになる。

団					
１班	２班	３班	４班	５班	６班
１－Ａチーム	２－Ａ	３－Ａ	４－Ａ	５－Ａ	６－Ａ
１－Ｂチーム	２－Ｂ	３－Ｂ	４－Ｂ	５－Ｂ	６－Ｂ
１－Ｃチーム	２－Ｃ	３－Ｃ	４－Ｃ	５－Ｃ	６－Ｃ
１－Ｄチーム	２－Ｄ	３－Ｄ	４－Ｄ	５－Ｄ	６－Ｄ

イ　シンボルマーク

５，６年生で各チーム（小グループ）のシンボルマークを考え、チームの旗を作成した。毎回の活動場所の目印とすることで、チームの所属意識を高めるようにした。（図２）

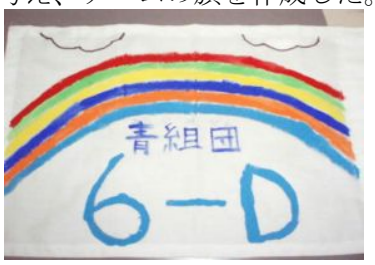


図２　シンボルマーク

ウ　名札

グループへの所属感を高めるために、児童の名札に２つの工夫をした。（図３）

◎自分のチームが分かるシール表記

◎すべての児童の名札にふりがなを付ける

同じグループのメンバーの名前を覚え、相手の名前を呼び合うことで、異学年の集団でもあたたかい関係が築けるようにした。

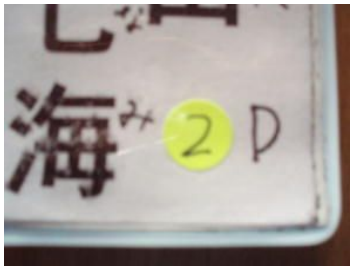


図３　　名札
（黄組２班Ｄチーム）

②　スマイルタイム

異学年交流の常時活動をスマイルタイムと名付けた。朝行事の時間や休み時間を活用して、月２～３回程度実施している。（図４，５）年間の大まかな活動内容を班長会議で計画し（表２）、児童が見通しをもって活動できるようにした。

リーダーとなる６年生は、低学年でも楽しめるような活動内容やルールを自分達で考え、計画や準備をしている（図６）。５年生は、自分のチームの１年生を活動場所に連れて行くことでサブリーダーとしての自覚が高められるようにした。（図７）

表2 スマイルタイム 月ごとの活動内容

月	活動内容
4月～7月	みんなで仲よく遊ぼう
8月～9月中旬	運動会の縦割り種目の練習をしよう
9月～10月	中央フェスティバルを成功させよう
11月～1月	みんなで仲よく遊ぼう
1月～3月	6年生に感謝の気持ちを伝えよう

図４　班（中グループ）での活動

図５　チーム（小グループ）での活動

図６　　６年生による計画の様子

図７　５年生による１年生のお迎え

③　教科等での交流

スマイルタイムでの異学年交流を生かし、授業の中での他学年との交流も試みた。国語や総合などの発表や交流では、対象相手がはっきりとし、意欲的に活動する児童が多く見られるようになった。（図８、９）

図８　６年生と大プールでの水慣れ
（１年体育）

図９　５年生にむけてのガイドブック作り
（６年国語）

（２）Ｑ－Ｕを用いた児童理解と学年・学級経営の改善

互いのことを大切にし、認め合うことができる学年・学級づくりのためには、子ども達一人ひとりの実態とともに子ども達が生活する学級集団の状態を把握することが大切である。

本校では、教師の日常観察では十分把握できない学級集団の状態を診断するためにＱ－Ｕを用いた。そして、その診断結果から学級経営の改善を図り、望ましい人間関係づくりに取り組んできた。（表３）

Ｑ－Ｕでは、「自分は認められている。居場所がある」と感じて学級に満足している子ども達は、学級生活満足群とされる。望ましい人間関係を形成しようとする意欲もこの状態で高まってくるといえる。学級内のすべての子が満足群にいる学級集団を育成することが学級経営の目指すところである。

本頁右段の実践例は、満足群の児童が増加した学級経営の事例である。

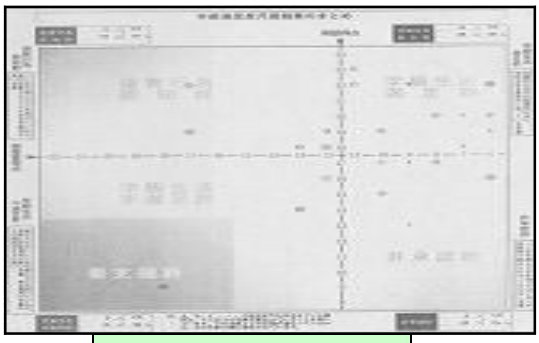
表３　Ｑ－Ｕを用いた学年学級経営改善の流れ

時　期	内　　容
５月	○Ｑ－Ｕについて職員研修
６月	○第１回Ｑ－Ｕ実施
７月夏季休業中	○講師を交え、学年毎に各学級のＱ－Ｕ結果分析と対応策の検討
８月夏季休業中	○学級経営の修正（対応策作成） ○学級経営に生かす教育相談の考え方と技法について職員研修
９～12月	○各学年・学級における実践 ・ルール形成・人間関係づくり ・配慮を要する児童への働きかけ
12月	○第２回Ｑ－Ｕ実施
１～３月	○学級経営の修正・強化

図10　友達と一緒に活動する楽しさ

①実践事例（平成20年度　中学年）

６月のＱ－Ｕ結果　　学級生活満足群48％



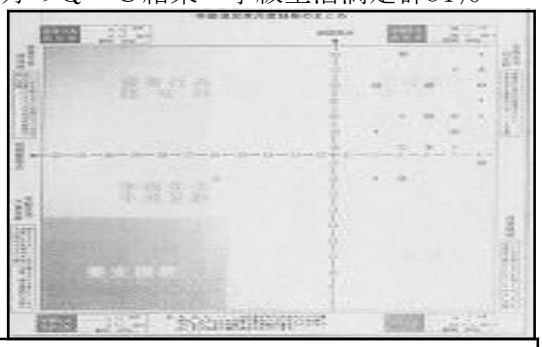
学級毎に結果分析と学級経営の対応策の検討

○活発で準リーダー的な子が非承認群にいるのが疑問に感じる。気にとめていく必要がある。
○要支援群に属する子は、友達から誘われても一緒に行動せず一人でいることが多い。不安傾向があるのか、原因を探っていく。

学級経営の修正：対応策

○毎週末の日記から、子ども達の日常生活や思いを把握し、コメントを添え共感的理解を示す。
○授業中に自分の考えを発表する場を多く設定したり一人ひとりがそれぞれ個性があること、かけがえのない存在であることを機会を捉えて語りかけたりすることで互いに認め合える雰囲気をつくるよう心がける。
○生活班で給食当番や掃除を行い、その中で互いを認め合い協力し合いながら活動が進められるように日々の指導を大切にする。
○要支援群の児童には常に配慮して声かけをする。
○侵害行為認知群の児童に対してはわずかなことでも認めて、自信をもたせる。
○朝・帰りの会を重視し、学級生活における問題を早期に解決する。
○友達と一緒に活動する楽しさを味わえる体験を取り入れる。（図10）

12月のＱ－Ｕ結果　学級生活満足群84％



【考察】満足群が48％から84％に変化し、お互いに認め合える学級が育っていると考える。
要支援群だった児童も、非承認群ではあるが座標中心に近い位置に変化した。担任の言葉かけや学級への働きかけが有効であったといえよう。

（３）校内の環境整備

言語環境の整備と校内掲示物の工夫を通して、一人ひとりの存在や思いが大切にされるあたたかい環境づくりを進めた。（表４）

表３　　21年度　校内環境整備計画

ねらい	内　　容
アあたたかな言語環境	・さん・君付けの定着 ・あったか言葉の励行
イ人権意識を高める	・人権にかかわる学習活動の紹介 ・人権だより、人権標語
ウ自己有用感を高める	・異学年交流活動ポケットの活用 ・異学年交流活動紹介コーナー ・各学年の学習活動の成果の発信
エ落ち着いた生活をめざす	・学級への所属感を高める掲示 ・児童会からの学校生活のめあてやルールについての投げかけ

ア　あたたかな言語環境づくり

(ｱ) さん・君付け

お互いの名前を大切にすることは、相手を認める基本であると考える。さん・君付けで呼んだ後に、乱暴な言葉は出てこない。さん・君付けをすることであたたかな人間関係を築けるようにした。

(ｲ)　あったか言葉

言われてうれしい言葉を出し合い、望ましい人間関係をつくる言葉を考えさせた。（図11）

図11　あったか言葉の学習

イ　人権意識を高める環境づくり

人権にかかわる学習や行事ごとのふりかえりができるようにする。また、外国籍児童に配慮し、３ヶ国語での掲示をした。（図12､13）

図12　人権朝礼、人権集会後の掲示

図13　中央玄関正面の人権コーナー

ウ　自己有用感を高める環境づくり

スマイルタイムの事前の連絡や、活動後の感想を交流するために、スマイルポケット（図14）を作成した。また、スマイルタイムコーナーの掲示板（図15）では、児童のよさや頑張りを伝えるために、友達や教師からの感想文を紹介した。

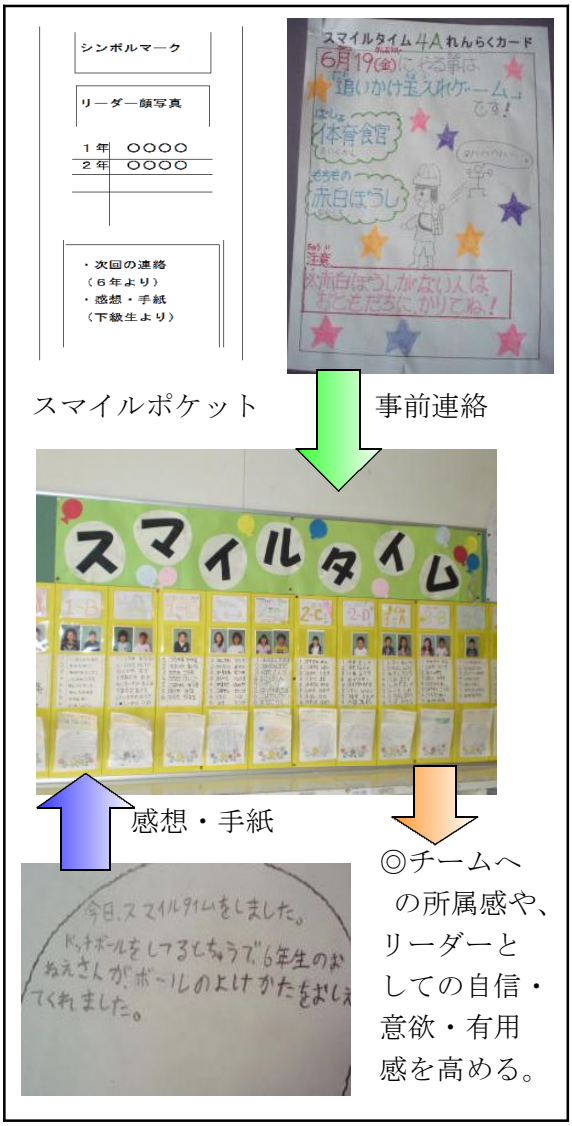


図14　スマイルポケット

図15　スマイルタイムコーナーの掲示

エ　落ち着いた生活を目指す環境づくり

自分達の学校に肯定的なイメージをもち、ルールを守る意識が高められるように児童会中心に作成・掲示をした。（図16）

図16　中央小のよいところ（児童会）

４　成果と課題

〈成果〉

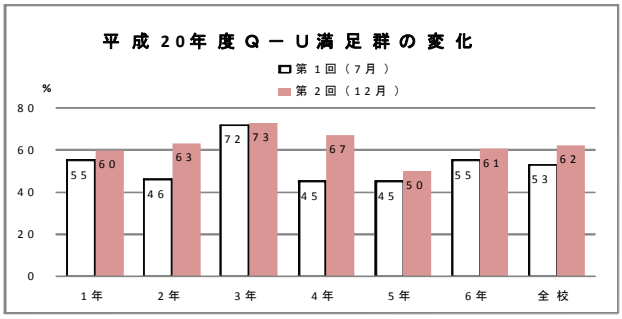
○異学年交流活動の実践を積み重ねていく中で、休み時間には同じグループの子同士が声をかけ合ったり、高学年と低学年が仲良く遊んだりする姿が昨年度より多く見られるようになってきた。また、普段学級で消極的な児童が、スマイルタイムでは積極的にまわりの児童とかかわり合おうとする場も見られるようになった。

（スマイルタイムの感想より）

> ７月までにやった遊びは宝探しとしっぽ取りとどろけいと○×クイズと進化じゃんけんです。気を付けたり工夫したことは、１年生でも分かるように説明をしたことです。困った事は、２年生の子が泣いちゃった時があって大変でした。泣いちゃった原因は説明不足でよく分からなかったからだと思います。うれしかった事は３年生の女の子に「夏休みが終わっても楽しい遊びを考えてください。」と言われた事です。これからも楽しい遊びを考えたいです。（６年）

○教師の勘に頼った学級内の人間関係の把握や支援法を、Ｑ－Ｕを行ったり、専門家の指導を受けたりすることにより改善することができた。これにより、一人ひとりが大事にされる雰囲気が学級内に生まれ、担任と児童及び、児童同士の人間関係が向上し、学級満足群の児童が増加した。（表４）

表４　Ｑ－Ｕ満足群の変化



○Ｑ－Ｕ検討会では学年にかかわる教師が全員で学年の子どもを支援していこうという意識が生まれた。さらに異学年交流活動では教師が学年・学級を越えて子ども達にかかわることでより多くの目で子どものよさを見取ることができるようになった。

〈課題〉

○異学年交流活動では、リーダーとなる６年生は自分の役割を意識して活動することができている。今後は下学年の児童も発達段階に応じて、自己有用感が高められるように活動内容や計画をさらに充実させることが課題である。

○学年内のＱ－Ｕ検討会の情報をさらに学校全体で共有化し、教師集団の指導力向上を図っていくことが今後の課題である。

５　おわりに

スマイルタイムの各班担当教師が子ども達のよさや頑張りを発見し、それを学級担任に伝える姿が職員室で見られるようになった。

教師の子ども達を見守るまなざしがあたたかく変わること～その子のよさを認め、本人に伝えること～が自己有用感を高め、子どもが望ましい人間関係を築いていく原点ではないだろうか。